

校長先生の初恋物語

第44話 最悪の席

くじびきが始まりました。みんなときどきしながら、足長君とまじめ子さんのところに行き、順番にくじを引いていきました。とっくんは、あえて列の後ろの方につきました。「残り物には、福がある。」ということわざを思い出したからです。足長君はによろひげパワーを使ってきます。それにたいこうできるのは、「残り物には福がある。」しか残っていません。

よしこさんは、一番早くまじめ子さんのところに行って、女子の一番でくじを引いていました。ですから、よしこさんの席が最初に決まりました。よしこさんの新しい席は、教室のすみのほうでした。

とっくんは、気になりました。それは、足長君の顔です。よしこさんの席が決まった瞬間、足長君は、あやしい顔をしていました。何かをたくらんでいる時の足長君は分かりやすいのです。「足長ブラック」に変身するのです。

とっくんはあまりにもあやしい足長君のことをずっと見ていました。絶対に何かひきょうなことをしてくるはずです。

思った通り、足長君は、とつぜんあやしい行動をとりはじめました。

「みんなごめんごめん。番号を書き忘れたくじがあるかもしれない。男子のくじは、もう一度確認するから男子のみんなは、一度席にもどってください。」

男子のみんなはいったん席に着きました。女子のくじだけがそのまま行われました。足長君は、一度箱の中から全てのく



じを出して、番号を確認していきました。とっくんは「はっ。」としました。「これだ。もしかして、足長君は、よしこさんのとなりの席の番号を自分がとることができるよう、何か細工をしているのかもしれない。」

とっくんは、足長君のやることをまます、じーっと見続けました。少しでもあやしい動きがあったら、によろひげ先生に言うつもりでした。時々、足長君は、とっくんの方を「ちらっ、ちらっ。」と見てきました。そしてまた、とっくんに向かって、にやっとなったんです。その直後です。「あっ。」と足長君は声を出して、くじの紙を床に全部落としてしまったんです。でも、とっくんには、落としてしまったのではなく、わざと落としたように見えました。「ごめんごめん。」

足長君はあわてて拾っていました。そして、みんなからは見えない先生の机の裏側で、紙をひろいながらなにやらもぞもぞしていました。完全にあやしすぎます。

足長君は紙を全部ひろい終えて、再びくじを箱の中にもどしてから言いました。

「じゃあ、男子もくじをひきに來てください。」

一度席にもどった男子のみんなが、再び足長君のところに集まり、順番にくじを引いていきました。とっくんは列の一番後ろについて引きました。箱の中に手を入れて、手に当たった1枚をまよわず引きました。そのあと、くじをつくった足長君が、一番最後にくじを引きました。

結果は、最悪です。とっくんは、よしこさんと席がはなれました。しかも、とっくんのクラスは、男子の方が人数が多くて、隣は男子になりました。しかも、その男子が、ジャイアンです。あばれんぼうで、いばっているジャイアン。きらわれもののジャイアン。だれとも仲良くしようとしないうジャイアンです。

もっと悪いのは、よしこさんのとなり。よしこさんのとなりの席になったのは、やっぱりあの人でした。

次回予告 じごくのような毎日

